

【A年】待降節第1主日(2024年12月1日)

【旧約聖書日課】イザヤ書 2章1～5節

1アモツの子イザヤが、ユダとエルサレムについて幻に見たこと。

2 終わりの日に

主の神殿の山は、山々の頭として堅く立ち
どの峰よりも高くそびえる。

国々はこぞって大河のようにそこに向かい

3 多くの民が来て言う。

「主の山に登り、ヤコブの神の家に行こう。

主はわたしたちに道を示される。

わたしたちはその道を歩もう」と。

主の教えはシオンから

御言葉はエルサレムから出る。

4 主は国々の争いを裁き、多くの民を戒められる。

彼らは剣を打ち直して鋤とし

槍を打ち直して鎌とする。

国は国に向かって剣を上げず

もはや戦うことを学ばない。

5 ヤコブの家よ、主の光の中を歩もう。

【使徒書日課】

ローマの信徒への手紙 13章8～14節

8互いに愛し合うことのほかは、だれに対しても
借りがあつてはなりません。人を愛する者は、律
法を全うしているのです。9「姦淫するな、殺すな、
盗むな、むさぼるな」、そのほかどんな掟があつ
ても、「隣人を自分のように愛しなさい」という
言葉に要約されます。10愛は隣人に悪を行いません
。だから、愛は律法を全うするものです。

11更に、あなたがたは今がどんな時であるかを
知っています。あなたがたが眠りから覚めるべき
時が既に来ています。今や、わたしたちが信仰に
入ったころよりも、救いは近づいているからです。

12夜は更け、日は近づいた。だから、闇の行いを脱
ぎ捨てて光の武具を身に着きましょう。13日中を
歩むように、品位をもって歩もうではありません
か。酒宴と酩酊、淫乱と好色、争いとねたみを捨
て、14主イエス・キリストを身にまといなさい。欲
望を満足させようとして、肉に心を用いてはなり
ません。

【福音書日課】マタイによる福音書 24章36～44節

36「その日、その時は、だれも知らない。天使たち
も子も知らない。ただ、父だけがご存じである。

37 人の子が来るのは、ノアの時と同じだからであ
る。38 洪水になる前は、ノアが箱舟に入るその日
まで、人々は食べたり飲んだり、めとったり嫁い
だりしていた。39 そして、洪水が襲って来て一人
残らずさうまで、何も気がつかなかった。人の
子

が来る場合も、このようである。40 そのとき、
畑に二人の男がいれば、一人は連れて行かれ、も
う一人は残される。41 二人の女が臼をひいてい
れば、一人は連れて行かれ、もう一人は残される。

42 だから、目を覚ましていなさい。いつの日、自
分の主が帰って来られるのか、あなたがたには分
からないからである。43 このことをわきまえてい
なさい。家の主人は、泥棒が夜のいつごろやって
来るかを知っていたら、目を覚ましていて、みす
みす自分の家に押し入らせはしないだろう。44 だ
から、あなたがたも用意していなさい。人の子は
思いがけない時に来るからである。」

45 ヤコブの家よ、主の光の中を歩もう。

46 ヤコブの家よ、主の光の中を歩もう。

47 ヤコブの家よ、主の光の中を歩もう。

48 ヤコブの家よ、主の光の中を歩もう。

49 ヤコブの家よ、主の光の中を歩もう。

50 ヤコブの家よ、主の光の中を歩もう。

【聖書協会共同訳】(2018年版)読み比べ

イザヤ書 2章1～5節

1アモツの子イザヤがユダとエルサレムについて
幻に示された言葉。

2 終わりの日に

主の家の山は、山々の頭として堅く立ち
どの峰よりも高くそびえる。

国々はこぞって川の流れのように

そこに向かい

3 多くの民は来て言う。

「さあ、主の山、ヤコブの神の家に登ろう。

主はその道を私たちに示してくださる。

私たちはその道を歩もう」と。

教えはシオンから

主の言葉はエルサレムから出るからだ。

4 主は国々の間を裁き、

多くの民のために判決を下される。

彼らはその剣を鋤に

その槍を鎌に打ち直す。

国は国に向かって剣を上げず

もはや戦いを学ぶことはない。

5 ヤコブの家よ、さあ、主の光の中を歩もう。

ローマの信徒への手紙 13章8～14節

8互いに愛し合うことのほかは、誰に対しても借りがあってはなりません。人を愛する者は、律法を全うしているのです。9「姦淫するな、殺すな、盗むな、貪るな」、そのほかどんな戒めがあっても、「隣人を自分のように愛しなさい」という言葉に要約されます。10愛は隣人に悪を行いません。だから、愛は律法を全うするものです。

11さらに、あなたがたは今がどんな時であるかを知っています。あなたがたが眠りから覚める時がすでに来ています。今や、私たちの救いが、初め信じた時よりも近づいているからです。12夜は更け、昼が近づいた。だから、闇の行いを脱ぎ捨て、光の武具を身に着けましょう。13日中を歩むように、品位をもって歩もうではありませんか。馬鹿騒ぎ〔別訳→酒宴〕や泥酔、淫乱や放蕩、争いや妬みを捨て、14主イエス・キリストを着なさい。欲望を満足させようとして、肉に心を向けてはなりません。

マタイによる福音書 24章36～44節

36「その日、その時は、誰も知らない。天使たちも子も知らない。ただ、父だけがご存じである。37人の子が来るのは、ノアの時と同じだからである。38洪水になる前、ノアが箱舟に入る日まで、人々は食べたり飲んだり、めとったり嫁いだりしていた。39そして、洪水が来て一人残らずさうまで、何も気が付かなかった。人の子が来る場合も、このようである。40その時、畑に二人の人がいれば、一人は取られ、一人は残される。41二人の女が臼を挽いていれば、一人は取られ、一人は残される。42だから、目を覚ましていなさい。いつの日、自分の主が来られるのか、あなたがたには分からないからである。43このことをわきまえていなさい。家の主人は、盗人が夜のいつごろやって来るかを知っていたら、目を覚ましていて、みすみす自分の家に忍び込ませたりはしないだろう。44だから、あなたがたも用意していなさい。人の子は思いがけない時に来るからである。」

黙想のためのノート

次主日の教会暦と聖書日課

・12月1日「待降節第1主日」の日課主題は「主の来臨の希望」。

・旧約聖書日課は、「イザヤ書」から、「終わりの日」の希望を告げる預言の箇所。使徒書日課は、「ローマの信徒への手紙」から、キリスト者としての生き方の基本姿勢を教える箇所。福音書日課は、「マタイによる福音書」から、終末についての一連の教えの一部。

旧約日課(イザヤ2章より)

・「イザヤ書」は、ユダヤ正典(ヘブライ語聖書)「後の預言者」の第一巻として扱われる預言文書。前8世紀後半に南王国ユダの宮廷預言者として活動した祭司イザヤの預言活動録と預言句集を集成したものであるが、40章以下は前6世紀バビロン捕囚期以降に付加されたものと考えられ、「第二イザヤ」として区別される。「第二イザヤ」は、正典「預言者」編纂に携わった集団が歴史的預言者イザヤを預言者的伝統の模範とし、自分たちをその正統な後継者と位置づけるために、本来の「イザヤの預言の書」に付加される形で置かれたと推認される。この編集に際して、本来の「イザヤの預言の書」の部分(1～39章)にどの程度手が加えられたかについては、議論がある。

・日課箇所は1節に小標題の付されているとおり、まとまりのある預言句集の冒頭に当たるが、まとまりがどこまでの範囲を含むのかは、明瞭でない。同様の小標題が次に現れる13章の前までをこの預言句集のまとまりと見る学者もあるが、他方で2:5までの限定的な範囲のみと見る学者もある。文学様式から判断すれば、6:1に年代を付した逸話が置かれており、2～5章を一つの小標題のもとにあるまとまりと解するのが自然である。6章および続く7章、また36章以下に王の年代を明示する逸話が置かれていることを踏まえれば、「イザヤ書」1～39章は全体として年代順の時代背景を前提として配置されていると考えることができるので、日課箇所を含む2～5章は、南王国(ユダ)ウジヤ王(在位=前783～742年頃)の最晩期を背景としていると、一応考えることができる。この時代、北王国(イスラエル)では、40年統治して王国史上最大の繁栄を築いたヤロブアム王(在位=前786～746年頃)が没した後、王朝の断絶と王権奪取を巡る混乱に陥っていた。南王国もこの北王国の混乱に巻き込まれ、それまでは北王国に従属する小国にすぎなかった南王国の権力構造に大きな変化が生じ始めていたと考えられる。「ダビデ王伝説」を王国の礎とし、その象徴であるエルサレム神殿を「シオンの丘」とも呼んで神聖視してきた南王国(ユダ)が、北王国領内の地方聖所との関係を強め、宗教伝承の一体化が強く求められるようになり始めたのは、この頃のことと推認される。日課箇所は、このような時代背景の中で、一種の宗教スローガンとして発せられた預言と解される。

・これが宗教スローガンであったとの仮説は、日課箇所 2～5 節とほぼ同じ預言句がミカ書 4:1～3 にも見られることから裏付けられる。「ミカ書」は、「イザヤ書」1～39 章と同時代に活動した預言者の書。

・3 節「ヤコブの神の家(ベト・エル)」は、創世記 28 章に伝えられるヤコブ伝承にあるとおり、本来は「ベテル」の聖所を指していたと考えられる。「ベテル」はヤコブ伝承に立つ聖所として古来知られ、部族連合として成立した北王国「イスラエル」の共通基盤と位置づけられてきたと考えられ、イエフ王朝時代は国家聖所の地位にあったとされる(ホセア書 10 章、同 12 章、アモス書 7:10 以下など参照)。しかし、ヤロブアム王没後、イエフ王朝が崩壊すると、「ベテル」も世俗的後ろ盾を失い、ベテルの聖所祭司集団は新たな関係をユダ・エルサレム王権に求めたと考えられる。エルサレム神殿祭司であるイザヤは、自分たちを「ベテル」の上位に位置づける宗教序列を提示し、「ヤコブの家」=北部諸部族を「ダビデの家」=ユダ王国のもとに組み入れるという壮大な構想を提示しているのである。

使徒書日課(ローマ 13 章より)

・「ローマの信徒への手紙」は、「パウロ書簡集」の第一に置かれた書簡文書。パウロが未訪の「ローマ教会共同体」を訪問する計画をあらかじめ伝え、受け入れてもらうために、また、その後のエスパニア伝道計画に協力してもらうために著した(15 章参照)。そのために、パウロは、「ガラテヤ書」に見られるような神学論争となる議論展開を避け、より調停的で包摂的な福音理解を旧約聖書に基づいて展開し、ユダヤ人と異邦人に共通の信仰的基盤を提示しようとしている。その基盤に基づいて具体的な生き方を提示しているのが 12～14 章で、日課箇所は、その中に含まれる。

・パウロが福音に基づく信仰者の生き方を集約して「愛」に帰着させることは、どの書簡にも見られることである。日課箇所では、「愛」を「律法」の戒め(掟)の要約とし、レビ記 19:18 を引用して「隣人を自分のように愛しなさい」と提示している点で、共観福音書の伝える「最も重要な掟」(マタイ 22:34～40 など)との共通性が明白である。ただし、このレビ記の句を「律法」全体の要約として位置づける見方は、主イエスに始まったことではなく、前 1 世紀にすでにラビ・ヒレルの学派で提唱されていたことである。主イエスやパウロは、そのことを知ったうえで、そのまま受容していたと考えられる。ただし、福音書において主イエスが「愛すること」を教えている事例は、必ずしも多くはない(マタイでは、「山上の説教」の「敵を愛しなさい」、金持ちの青年への教え、最も重要な掟について、など)。

・「愛」を「借り(負うべきもの/義務)」と結びつけて教える事例は、ルカ 7 章「罪深い女の逸話」にも見られる。また、マタイ 18 章は「赦し」を「借り」と結びつけて教えているが、マタイにおける「赦し」は「敵を愛し」(5:44)の展開でもあり、密接な関連を持っている。

・11 節以下は、終末的な言説を用いながら、目覚めて品位をもった生活を送る姿勢が説かれている。初期教会には終末待望が強くあったとされるが(Ⅰテサ 4～5 章など)、パウロは必ずしも終末そのものを強調しない。むしろ、終末信仰に基づいて現在の生活を整えることに重きを置いて教えている。

福音書日課(マタイ 24 章より)

・日課箇所は、終末の教えとして知られる 24～25 章の中の一部で、「人の子の到来」をたとえによって教える内容となっている。一連の終末の教えのうち 24 章部分は共観福音書(マタイ、マルコ、ルカ)に並行箇所が見られ、その文学様式から「小黙示録」と呼ばれることもある。特に日課箇所が述べる「人の子の到来」は、旧約黙示文学の最右翼とされる「ダニエル書」に見られる「人の子のような者が天の雲に乗り…」(ダニ 7:13)という叙述に着想を得ているとされ、黙示思想に基づく終末観との関連が想定される。ただし、そのような関連があるとして、どこまで主イエスの思想そのものに組み込まれていたかは、判断しがたい。

・「人の子(ヒュイオス・アンテロープウ)」という表現は、四福音書を中心に広く新約中に見られる(新共同訳の日本語訳で 102 例)。これらは、しばしば、前述の黙示文学的終末観に基づいた終末的メシアの呼称であるとされるが、そのような意図で用いられている用例は限られており、ほとんどの場合は、「神ではない人間そのもの」という意味で用いられている。つまり、「神の子」の対義語としての「人の子」という用法である。これは、旧約で広く用いられている「人の子(ベン・ハアダム)」に対応した用法であり、「ダニエル書」7:13 も強調点は「人間」であることにある。

・37 節/39 節「来る」の原語は、ギリシア語「パルーシア」で、「隣席/臨在」とも訳される。24 章中では 3 節および 27 節でも用いられているが、四福音書で他の用例はない。使徒書では 20 例あり、内 14 例が「パウロ書簡」での用例であることから、パウロ的な用語とみなされることがある。この語は、「パレイミ」(←パラ+エイミ)から派生した語で、原義は「傍らにること」。この語のラテン語訳として「アドヴェントゥス」が充てられるが、「アドヴェントゥス」が「到来」の意味合いが強いのに対して、「パルーシア」は「存在」の意味合いが強い。

・42 節「目を覚ましていなさい」の原語は、ギリシア語「グレゴレオー」。この語は、「起こす/立ち上がらせる/復活させる」と訳される「エゲイロー」の派生語。ロマ 13:11「眠りから覚める」は、「エゲイロー」が用いられている。新約で「復活する」と訳される語は、この「エゲイロー」と「アニステーミ」。つまり、新約諸文書中で「グレゴレオー(目を覚ます)」は、「復活」信仰と結びついて認識されている。「目を覚ましていなさい」は、「パウロ書簡」でもしばしば簡潔に触れられている(Ⅰコリ 16:13、コロ 4:2、Ⅰテサ 5:6,10)ほか、ペトロ書(Ⅰペト 5:8)、黙示録(黙 3:2,3、16:15)にも見られる。

来週の誕生日 (12月1日～7日)

主日礼拝の讃美歌から

- ・21-230「起きよと呼ぶ声」(= I 174「起きよ、夜は明けぬ」)は、16世紀後半ドイツの神学者ニコライの作詞作曲。「コラルの王」と称される讃美歌。この讃美歌に基づいて、バッハ(カンタータ 140 番)らが作曲している。
- ・21-236「見張りの人よ」(= I 218 番「夜を守る友よ」)は、19世紀イギリスの外交官パウリングの作詞。曲は、アメリカの教会音楽家メーソンがこの詞のために作曲。讃美歌 21 では、I 218「世を守る友よ」から全面的に改訳されている。
- ・21-232「神のみ子は世に来られた」は、ボヘミア兄弟団の讃美歌で、作曲のヴァイセが編纂出版した1544年版同団讃美歌集に作詞者不詳で収録されたもの。ヴァイセは、フランシスコ会修道士で、宗教改革に共鳴してボヘミア兄弟団に参加、ルターとも親交があった人物。この讃美歌に基づいて、バッハも数曲を作っている。
- ・21-235「久しく待ちにし」は、18世紀英国教会史司祭でメソジスト運動の創始者となったジョン・ウェスレーの弟チャールズ・ウェスレーの作詞で、英語圏では最も広く歌われているアドヴェント讃美歌の一つ。この歌詞に組み合わせられた曲は複数あるが、収録曲は、19世紀英国の教会音楽家ゴントレットの作曲したもの。

21-230「『起きよ』と呼ぶ声」

Wachet auf, ruft uns die Stimme

1. Wachet auf / ruft uns die Stimme / Der Wächter sehr hoch auff der Zinnen, / Wach auff du Statt Jerusalem. / Mitternacht heißt diese Stunde / Sie ruffen uns mit hellem Munde: / Wo seydt ihr klugen Jungfrauen? / Wohlauff / der Bräutigam kompt / Steht auff / die Lampen nimpt / Halleluia! / Macht euch bereit / Zu der Hochzeit / Ihr müsset ihm entgegengehen.
2. Zion hört die Wächter singen / Das Herz thut ihr vor Frewden springen, / Sie wachet und steht eilend auff: / Ihr Freund kompt vom Himmel prächtig, / Von Gnaden starck, von Wahrheit mächtig: / Ihr Liecht wirdt hell, ihr Stern geht auff. / Nu komm du werthe Kron / Herr Jesu, Gottes Sohn / Hosianna. / Wir folgen all zum Frewden Saal / Und halten mit das Abendmal.
3. Gloria sey dir gesungen / Mit Menschen und Englischen Zungen / Mit Harpfen und mit Cymbaln schön: / Von zwölff Perlen sind die Pforten / An deiner Stattt / wir sind Consorten / Der Engeln hoch umb deinen Thron / Kein Aug hat je gespürt / Kein Ohr hat mehr gehört / Solche Freuwde. / Deß sind wir fro / jo / jo / Ewig in dulci iubilo.

21-241「来たりたまえわれらの主よ」

O Dieu du clemens

1. O Dieu de clémence, / Viens par ta présence, / Combler nos désirs, / Apaiser nos soupirs.
Sauveur secourable, / Parais à nos yeux, / A l'homme coupable / Viens ouvrir les cieus; / Céleste victime, / Ferme-lui l'abîme.
2. O bonté divine! / Dieu vers nous s'incline; / Du divin amour / Paraît enfin le jour. / Dans une humble étable
Il va naître enfant, / Pauvre et misérable, / Dans le dénûment. / Heure d'espérance! / C'est la délivrance!
3. Un dur esclavage / Fut notre partage: / De tout l'univers / Il vient briser les fers.

- Loin de sa presence / Le péché s'enfuit, / Et par sa puissance / L'enfer est détruit; / A tous sa naissance / Rendra l'innocence.
4. Gloire au divin Maître / Qui bientôt va naître! / Que nos chants joyeux / Eclatent jusqu'aux cieus!
Que les chœurs des anges / Au divin séjour / Chantent les louanges / De ce Dieu d'amour; / Et que par le monde / Toute voix réponde:

21-236「見張りの人よ」

Watchman, tell us of the night

1. Watchman, tell us of the night, / what its signs of promise are. / Traveler, o'er yon mountain's height, / see that glory-beaming star. / Watchman, does its beauteous ray
aught of joy or hope foretell? / Traveler, yes; it brings the day, / promised day of Israel.
2. Watchman, tell us of the night; / higher yet that star ascends. / Traveler, blessedness and light, / peace and truth its course portends. / Watchman, will its beams alone / gild the spot that gave them birth? / Traveler, ages are its own; / see, it bursts o'er
all the earth.
3. Watchman, tell us of the night, / for the morning seems to dawn. / Traveler, darkness takes its flight, / doubt and terror are withdrawn. / Watchman, let thy wanderings cease; / hie thee to thy quiet home. / Traveler, lo! the Prince of Peace, / lo! the Son of God is come!

21-232「神のみ子は世に来られた」

Gottes Sohn is kommen

1. Gottes Sohn ist kommen / uns allen zu Frommen / hier auf diese Erden / in armen Gebärd, / daß er uns von Sünde / freie und entbinde.
2. Er kommt auch noch heute / und lehret die Leute, / wie sie sich von Sünden / zur Buß sollen wenden, / von Irrtum und Torheit / treten zu der Wahrheit.
3. Die sich sein nicht schämen / und sein' Dienst annehmen / durch ein' rechten Glauben / mit ganzem Vertrauen, / denen wird er eben / ihre Sünd vergeben.
4. Denn er tut ihn' schenken / in den Sakramenten / sich selber zur Speisen, / sein Lieb zu beweisen, / daß sie sein genießen / in ihrem Gewissen.
5. Die also fest glauben / und beständig bleiben, / dem Herren in allem / trachten zu gefallen, / die werden mit Freuden / auch von hinnen scheiden.
6. Denn bald und behende / kommt ihr letztes Ende; / da wird er vom Bösen / ihre Seel erlösen / und sie mit sich führen / zu der Engel Chören.
7. Wird von dannen kommen, / wie dann wird vernommen, / wenn die Toten werden / erstehn von der Erden / und zu seinen Füßen / sich darstellten müssen.
8. Da wird er sie scheiden: / seines Reiches Freuden / erben dann die Frommen; / doch die Bösen kommen / dahin, wo sie müssen / ihr Untugend büßen.
9. Ei nun, Herre Jesu, / richte unsre Herzen zu, / daß wir, alle Stunden / recht gläubig erfunden, / darinnen verscheiden / zur ewigen Freuden.

21-235「久しく待ちにし」

Come, Thou Long-expected Jesus

1. Come, thou long-expected Jesus, / born to set thy people free; / from our fears and sins release us; / let us find our rest in thee.
2. Israel's strength and consolation, / hope of all the earth thou art; / dear desire of every nation, / joy of every longing heart.
3. Born thy people to deliver, / born a child and yet a king, born to reign in us forever, / now thy gracious kingdom bring.
4. By thine own eternal Spirit / rule in all our hearts alone; / by thine all-sufficient merit / raise us to thy glorious throne.